

静岡
SHIZUOKA

静岡がんセンター研究所開設記念 ファルマバレー医看工連携企業セミナー開催

静岡県立静岡がんセンター研究所のオープンを記念した「ファルマバレー医看工連携企業セミナー」(主催：スルガ銀行株式会社、後援：財団法人企業経営研究所他)が11月24日(木)、同研究所にて2部構成で開催された。

第1部は、オリンパス株式会社の植田康弘事業部長、東レ・メディカル株式会社の國友哲之輔常務理事を講師に招いた講演会で約200名が聴講(1階しおさいホール)。植田氏は「オリンパスにおけるバイオ・ライフサイエンス事業への展開」と題し、医療技術の方向性と技術革新の展望を踏まえた中で、同社の医療事業への展開並びに取り組み事例を紹介した。また、同社のグループ会社である三島オリンパス株式会社本社工場の静岡がんセンター隣接地への移転(2007年4月稼働予定)について説明、医工連携を通じ、ライフサイエンス研究を進め、患者さんへのやさしい医療の実現に寄与していきたいと



第1部 講演会(しおさいホール)



第2部 交流会(交流サロンいずみ)

語った。続いて、國友氏は「わが国の医療機器産業が直面する課題」と題し、ご自身の体験を事例にしながら医療機器産業の研究開発体制について論じ、課題を提示した。さらに、沼津市にて透析関連装置を製造している同社の最新鋭工場について説明し、ファルマバレー構想の推進に協力していきたいと述べた。

第2部は、会場を4階の「交流サロンいずみ」に移し、交流会が行なわれた。参加した約100名の方々は、講師の植田氏、國友氏と名刺交換を通じての意見交換や参加者間での情報交換を、時間の許す限り行ない、新たなネットワークづくりに努めた。

今後、今回のセミナー、交流会によって築かれたネットワークや同サロンにて行なわれる産学官の交流を通じ、新たな技術・製品・サービスなどが創造されることを期待したい。

神奈川
KANAGAWA

横浜から「風力発電」普及の波を

地球温暖化を防ぐため、世界規模で導入が進む風力発電。“風任せ”の側面はあるものの、発電コストでは石油火力に太刀打ちできるところまできた。その実体と改善すべき点を明らかにし、国内での普及に弾みをつける取り組みが、横浜市内で始まっている。

国内初の風力発電に関する国際シンポジウムが12月初旬、同市内のコンベンション施設で開かれ、約800人が参加した。主催は今年3月に発足した世界風力会議(本部：ブリュッセル)と、業界団体の日本風力発電協会、学術団体の日本風力エネルギー協会。

「環境行動都市」を標榜する同市が、会場使用料を割り引くなどインセンティブを与えて誘致した。シンポジウムでは先進地のヨーロッパ各国、市場として有望な中国などの事例が報告され、法制度の改善、洋上設置の技術開発などが提言された。

これに先立って同市は2006年度末の稼働をめどに、横浜港・瑞穂埠頭で大型風車(風力発電施設)の建設を進めている。定格出力は2,000キロワットで、高さは120メートル。インナーハーバー(内港)の中心に立つので、新たな観光資源としての期待も担う。

事業資金は国の補助金を活用するほか、ミニ公募債を発行して市民に参加のチャンスを与える。また、自然エネルギーによる発電実績を証明する「グリーン電力証



三菱重工業横浜製作所の金沢工場に設けられる日本最大の風車の完成イメージ写真

書システム」を導入し、市内企業の事業参画の機会を増やすとともに採算性を探る。

一方、国内唯一の大型風車メーカー・三菱重工業も、横浜製作所の金沢工場(横浜市金沢区)で一基あたりの出力が日本最大となる2,400キロワットの実証試験風車を建設している。運転開始は04年度末の予定だったが、05年末にずれ込む見通し。

同社は風車の受注が国内外で好調なことから、長崎造船所に一貫製造が可能な専用工場を新設し、05年10月から操業を開始した。横浜での実証試験などを踏まえて、台風や落雷など厳しい気象条件にも耐えられる日本型風車の量産を目指す。

世界風力会議によると、04年度末の風力発電設置容量は全世界で合計約4,730万キロワット。国別では、ドイツ(1,665万キロワット)、スペイン(826万キロワット)、米国(675万キロワット)の順。日本は約94万キロワットにとどまり、普及率のピッチを上げることが望まれている。